

〈資料紹介〉

高瀬真卿『いつまで草』(下)

古宇田 亮 修

はじめに

本稿は、一昨年度・昨年度の当研究所年報に引き続き、東京感化院の創業者として知られる高瀬真卿の日記風随想『いつまで草』(承前)を掲載するものである。

この『いつまで草』は、高瀬が創刊した『刀剣と歴史』の第八五号(一九一七年(大正六)一〇月)から、死去(一九二四年(大正一三)十一月一七日)の月に発行された第一六七号まで、数号の休載を除いて、約七年間八一回にわたり連載されたものである。今回、ここに復刻するのは、一九〇六年(明治三九)の一月一日から九月二九日の記述であり、二四回にわたり『刀剣と歴史』に連載されたものである。記載時期の詳細は、次頁に掲げた表を参照されたい。

長沼友兄¹⁾によれば、高瀬は一八八二年(明治一五)から一九二四年(大正一三)まで、四三年にわたり日記を書き、ご子孫より淑徳大学アーカイブズに寄贈された高瀬真卿関係資料には、二八冊の日記が現存する。しかしながら、明治三九年²⁾の日記は現存していないため、この年一月から九月の高瀬の動向を知るには、当資料が一次資料となろう。

〈表1〉高瀬真卿『いつまで草』（下）一覧

No.	記載時期	掲載誌(全て『刀剣と歴史』)	本稿頁
58	明治39年1月1日～	第144号, 大正11年9月	p.5
59	明治39年1月12日～	第145号, 大正11年10月	p.9
60	明治39年1月25日～	第146号, 大正11年11月	p.12
61	明治39年2月7日～	第147号, 大正11年12月	p.16
62	明治39年2月20日～	第148号, 大正12年1月	p.21
63	明治39年2月27日～	第149号, 大正12年2月	p.25
64	明治39年3月6日～	第150号, 大正12年3月	p.29
65	明治39年3月21日～	第151号, 大正12年4月	p.34
66	明治39年4月4日～	第152号, 大正12年5月	p.38
67	明治39年5月1日～	第153号, 大正12年6月	p.42
68	明治39年5月11日～	第154号, 大正12年7月	p.45
69	明治39年5月20日～	第155号, 大正12年8月	p.49
70	明治39年5月26日～	第156号, 大正12年12月	p.53
71	明治39年6月5日～	第157号, 大正13年1月	p.57
72	明治39年7月2日～	第158号, 大正13年2月	p.62
73	明治39年7月8日～	第159号, 大正13年3月	p.65
74	明治39年7月18日～	第160号, 大正13年4月	p.68
75	明治39年7月25日～	第161号, 大正13年5月	p.75
76	明治39年8月4日～	第162号, 大正13年6月	p.78
77	明治39年8月10日～	第163号, 大正13年7月	p.81
78	明治39年8月15日～	第164号, 大正13年8月	p.84
79	明治39年9月5日～	第165号, 大正13年9月	p.87
80	明治39年9月15日～	第166号, 大正13年10月	p.90
81	明治39年9月21日～	第167号, 大正13年11月	p.93

なお、『刀剣と歴史』第一六〇号(大正一三年四月)には、『いつまで草』に続いて、「太子堂の新居」と題する随筆が掲載されている。これは一九二四年(大正一三)五月三〇日に「荏原郡、世田ヶ谷町、字太子堂、三百五十番地」の敷地を借り受けた高瀬の新居建築から引越に関する記録として重要であるため、参考のため収録した。また、高瀬が亡くなる一週間前に発行された『刀剣と歴史』一六七号(大正一三年一月一〇日発行)には、『いつまで草』に続いて、「病人より」という一〇月一〇日付の文章が掲載されているが、これも参考のため収録した。

註

(1) 長沼友兄「(解説) 高瀬真卿日記について」(『高瀬真卿日記 一』淑徳大学アーカイブズ、二〇一二年所収)。

(2) 明治三八年二月二日までの日記は、『萩村日記 第十五』として残っているので、その続きとなるはずの『萩村日記 第十六』とも称すべき日記が何らかの理由で伝承されなかった可能性が考えられる。というのも、明治四〇年元日からの記録は、『羽皐雜記』という形で残っており、日記記録を重視していた高瀬がその間の一年間だけ日記を書かなかったことは想定しがたいからである。

(当研究所専任研究員)

主要参考文献

長沼友兄『近代日本の感化事業のさきがけ——高瀬真卿と東京感化院』(淑徳選書1)、淑徳大学長谷川仏教文化研究所、二〇一一年。
長沼友兄編『高瀬真卿日記 一〜六』(淑徳大学アーカイブズ叢書一〜六)、淑徳大学アーカイブズ、二〇一三〜一七年。

凡 例

一、底本には、当研究所所蔵本を用いた。底本をデジタル化した上で、マイクロソフト社のWORD上でレイアウトし、版下を作成したため、スキャン画像やレイアウトの不備は、筆者が全て責任を負うものである。尚、当研究所が所蔵する『刀剣と歴史』（創刊号から三五〇冊余り）は、おそらく一人の所有者の保管に成るものと推測されるほど保存状態が良好であり、その点で作業が比較的容易であったことを付しておく。

一、底本のルビは、著者のものというよりは、印刷所の組版職人が付したものと恐れ、誤りも散見されるが、当否の判断が不可能な箇所も多いので、原本通りとした。

一、底本には今日の人権上の観点からすると不適切と考えられる表現もあるが、資料の歴史的価値に鑑み、原本通りとした。

一、小活字で記される日記は、雑誌発行当時（大正期）の高瀬真卿の日記の抄録であり、埋め草として掲載されたものである（一一、一五、二〇、二四、三三、四八、六七、六八、七五、七七、八〇、八一、八三、八四、八六頁参照）。